

古文 読解問題 「徒然草」 世に語り伝ふること」① 問題

世に語り伝ふること、まことはあいなき^(a)にや、多くは皆虚言なり。

あるにも過ぎて人は物を言ひなすに、まして、年月過ぎ、境も隔たりぬれば、言ひたきままに語りなして、筆にも書きとどめぬれば、^①やがてまた定まりぬ。道々のものの上手のいみじきことなど、かたくななる人の、その道知らぬ^(b)は、そぞろに神のごとくに言へども、道知れる人は、さらに信も起こさず。^②音に聞くと見るときとは、何事も変はるものなり。

かつあらはるるをも顧みず、口にまかせて言ひ散らすは、やがて浮きたることと聞こゆ。また、我もまことしからずは思ひながら、人の言ひしままに、鼻のほどおごめきて言ふは、その人の虚言にはあらず。げにげにしく、ところどころうちおほめき、よく知らぬよしして、さりながら、つまづま合はせて語る虚言は、恐ろしきことなり。^②我がため面目あるやうに言はれぬる虚言は、人いたくあらがはず。皆人の興ずる虚言は、一人、「さもなかりしものを。」と言は^(c)んも詮なくて聞きおたるほどに、証人にさへな^(d)れて、いとど定まりぬべし。

とにもかくにも、虚言多き世なり。ただ、常にある、珍しからぬことのままに心得たらん、よろづ違ふ^(e)べからず。下さまの人の物語は、耳おどろくことのみあり。よき人は怪しきことを語らず。

かくは言へど、仏神の奇特、権者の伝記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは、^④世俗の虚言をねんごろに信じたるもをこがましく、「よもあらし。」など言ふも詮なければ、大方は、まことしくあひしらひて、偏に信ぜず、また、疑ひ嘲るべからず。

問一、次の「徒然草」について説明した文の(ア)～(エ)に入る言葉を答えなさい。

「徒然草」は(ア)時代に(イ)によって書かれた(ウ)文学である。世の中の全てのは絶えず変化し続けているという(エ)に基づいた日々の出来事について書かれている。

問二、空所(a)～(e)の助動詞の意味を答えなさい。

問三、傍線部①「やがてまた定まりぬ」の説明として最も適切なものを次の選択肢から選びなさい。

ア、昔の出来事が年月を経て忘れられてしまうため、人々が記録として書き残し、正しい内容として後世に伝えようとする事

イ、物事の真偽を確かめるために、人々が見聞きした内容を書き留め、その内容が後に公式な記録として定められること

ウ、人々が自由に語った内容が書物に記録されることで、さまざまな説が整理され、正しい内容だけが残るようになること

エ、人が語るうわさ話が誇張されて伝えられ、それが書き記されることで、内容の真偽にかかわらず事実であるかのように世間に定着してしまうということ

問四、傍線部②「音」の文中での意味として正しいものを次の選択肢から選びなさい。

ア、物音 イ、鳴き声 ウ、うわさ エ、便り

問五、傍線部③「我がため面目あるやうに言はれぬる虚言は、人いたくあらがはず」を現代語訳しなさい。

問六、傍線部④「世俗の虚言」について、筆者はどのような対処すべきと述べているか三十字程度で答えなさい。

読解問題 「徒然草」 世に語り伝ふること」① 解答・解説

問一 (ア) 鎌倉 (イ) 兼好法師・吉田兼好 (ウ) 随筆 (エ) 無常

問二 (a) 断定

(b) 打消

(c) 婉曲

(d) 受身

(e) 当然

問三 エ

問四 ウ

問五 自分にとって名誉になるように言われた嘘は、人はたいして抵抗しない

問六 虚言を安易に信じず、また疑い嘲らず適度に受け流すこと